徳島新聞　平成２６年３月２１日

時評とくしま

人生の壁を乗り越えよ

胸躍る授業への誘い

山崎　勝之
鳴門教育大学大学院教授

ここ3年ほどの間、千時間を超えて学校で予防教育をやってきた。そこで多くの学級を見ていると、学校現場の問題が自然と見えて来る。

特に気になるのは、個々の学級の運営が難しくなっていることだ。集団生活への順応度が落ちている。学校では学級単位の授業が中心になるが、この授業が円滑に進まず、多くの子どもが授業という時間と空間に居場所を失っている。そこから適応上の問題が顔を出す。いじめも不登校も、その引き金がここにある場合が多い。

子どもの問題は大人の問題につながる。最近の警察庁自殺統計をみると、14年連続で自殺者が3万人を超えていたが、一昨年から3万人以下に減少し始めた。とは言え、交通事故死の5倍以上の多さである。中でも、近年の20代の自殺者増が目を引く。

昨今の自殺者の減少は経済状況の立て直しによるところも大きいが、2万人を超える数字は、人の生きる力の恒常的な低さを物語っている。

近年、「中1ギャップ」という現象が取りざたされている。中学校の新環境への移行がうまく行かず、不登校や無気力など問題を抱える生徒が増える傾向だ。この問題を前に教育界は、そのギャップを埋めることに躍起になっている。しかし、それは違うだろう。学校教育の本質から言えば、ギャップを乗り越える力をつけることに目を向けるべきだ。

人生いたるところに壁がある。その壁を乗り越える力を育成することこそが、学校教育が担う重要な責務になる。家庭の教育力が落ち込んだ今は、確かにそうだ。

20代の若者の自殺が多いのは、人生のモラトリアムから離れるそのときに、大きな壁が立ちはだかるからだ。それは、大人社会への巣立ちであり、伴侶を得た新生活への選択と順応であろう。通常はこの壁を乗り越える力が育っているが、その力が欠落している。

児童生徒のうつ病が成人並みに多いことはご存じだろうか。うつ病と自殺の関係は深い。「うつ病の時代」と呼ばれる成人の難題は、すでに子ども時代に始まっている。この時代を終焉させるのは、学校教育をおいて他にはない。

その突破口はどこにあるのか。最短で効果大の方法は、教室での授業を子どもの喜びに変えることだ。もっと引きつけ、のめり込む授業にすることだ。授業に引きつけられ、誰もに居場所ができれば、学業、生活、健康の全ての面で改善が見込める。そこから壁を乗り越える子どもが育つ。徳島発の予防教育は、そのことを目指している。

徳島県では2年連続で自殺者が増加した。だがひるむことはない。飯泉知事よろしく、「教育課題解決先進県」徳島へ、と行こうではないか。

本ファイルの著作権は徳島新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は堅くお断りいたします。